

海外における待遇表現教育の問題点

台湾での研修会における「事前課題」分析(3)

川 口 義 一

キーワード

待遇表現・敬語・待遇表現指導・台湾における日本語教育

0. はじめに
1. 日本語の待遇表現に関する問題
 - 1-1. 狭義敬語の分類と用法
 - 1-2. 具体的な表現間の差異
2. 台湾人の日本語待遇表現使用の話題
 - 2-1. 自己の待遇表現使用経験
 - 2-2. 日中両語の待遇表現の差異
 - 2-3. 日本人の待遇表現使用実態
3. 待遇表現指導上の話題
 - 3-1. 指導方法に関する課題
 - 3-1-1. 指導法・教授法
 - 3-1-2. 指導の時期と範囲
 - 3-1-3. 学習者の誤りや質問に対する対処
 - 3-1-4. 学習者の心理に関する問題点
 - 3-2. 学習・教育環境に関する問題
4. まとめと今後の課題

本稿は、拙稿「海外における待遇表現教育の問題点 台湾での研修会における「事前課題」分析(1)」(『紀要』15号・2002 早稲田大学日本語研究教育セ

ンター)および「海外における待遇表現教育の問題点 台湾での研修会における「事前課題」分析⁽²⁾」(『講座日本語教育』38分冊・2002 早稲田大学日本語研究教育センター)の続編で、このシリーズの最終編である。第1編では上記「目次」の「0. はじめに」と「1. 日本語の待遇表現に関する問題」、第2編では「2. 台湾人の日本語待遇表現指導の話題」の部分で、それぞれ扱ったが、本稿では「3. 待遇表現指導上の話題」と「4. まとめと今後の課題」(上記目次のゴチック印刷の部分)を取り扱う。

3. 待遇表現指導上の話題

前回までで台湾の日本語教育における待遇表現の問題点として、日本語と中国語における待遇表現の類似点と相違点の認識が徹底していないこと、および、そのことも一因となって、日本語の待遇表現が「狭義の敬語」の問題に矮小化されていることなどを指摘したが、今回は、待遇指導の指導自体についてのどのようなことが話題として「事前調査」に現われているかを見ていくこととする。

3-1. 指導方法に関する課題

3-1-1. 指導法・教授法

指導に関しては、指導方法・指導の範囲や時期などについてさまざまな記述が見られるが、まず指導法・教授法についてのものから見ていく。

実際のコミュニケーション場面から離れたところで練習するので、多く話させようとしても結局母語で翻訳するような練習になってしまう(北・高) / コミュニケーションを通して、学習動機が高まるような楽しい雰囲気を作るコツはあるか(中・中) / どうすれば語彙や語形の作り方の説明だけで終わってしまわず、「敬語はおもしろい」と思わせられるか(高・高)

「翻訳や形態変化だけの練習を脱して」かつ「コミュニケーションを通しておもしろく」というのが理想の指導方法であると捉えられているようである。しかし、このとらえ方自体に落とし穴がある。というのは、まず「コミュニ

ケーションを通しておもしろく」と考えると、ロールプレイに頼りがちになるが、ロールプレイは、擬似的な敬語使用場面を設定しようとするから、いきおい「上司と部下」「教師と学生」のような人間関係が仮定されることになる。こうなると、同級生同士が社会的に上下のある人間関係を演じることになり、下の役に当たった学習者はあまり愉快的気持ちにならないなど、かえって不自然な会話練習を強いる結果になってしまう。

このようなジレンマを脱するためには、敬語使用を「上下関係」のある者同士のコミュニケーションの中に限定する考えから自由になり、「一般成人同士」のコミュニケーション場面を想定すればよい。「一般成人同士」で尊敬語や謙譲語を含む敬語使用のインターアクションを考えると、まず「道教え」などが思い浮かぶ。「ちょっと...教えていただけますか」「歩いていらっしゃるんですか」「地下鉄にお乗りになったほうがいかと思いますか」など、バラエティは多くないが、尊敬語や謙譲語を使う場面が提供できる。

つぎに、「街頭インタビュー」のような場面が同様の敬語使用を保証する。「ちょっと、伺ってもよろしいでしょうか」「よく...なさいますか」「...についてどのようにお考えになりますか」など、インタビューア役の学習者に尊敬語・謙譲語をともに使用する機会が与えられる。インタビューの内容などを自由に考えさせれば、個人の恋愛観や金銭感覚を聞き出すなど、楽しくおもしろい活動が可能である。

人前でのスピーチは、やはり敬語の使用を促す。クラスで試験をするたびに最高得点者を「チャンピオン」にして同級生の前であいさつをさせるというタスクを与えれば、「おはようございます。季節でございます」「これからもがんばって勉強いたします」などの丁寧語を、不自然な上下関係を仮定せずに使わせることができる¹⁾。高得点を取れない学生を「学校放送のインタビューア」役にしてインタビューさせれば、前述の「街頭インタビュー」と同様の練習効果が期待できる。

いろいろな場面の設定が必要だとは思うが、その場面ごとの会話例を集めることと微妙なニュアンスの説明がむずかしい。指導マニュアルがほしい(中・高) / 練習のための自然な場面を作ることは難しい。誤用を避けるため、一切の場合と一切の相手に尊敬語

を使うように教えてはどうか（高・高）

「いろいろな場面の設定」というのは、ある会話場面の、上下・親疎の関係がさまざまに変化するバリエーションだと考えると、たしかにその一つ一つの「微妙なニュアンス」を教えなければいけない。それが大変なことは自明であるため、「一切の場合と一切の相手に尊敬語を使うように」教えたくなるのも無理からぬことである。しかし、「いろいろな場面」というのを、「特定の意図を表現として伝える必要のある場面」と考え、その「表現意図」の類型化を行ってあげれば、教えるべき場面というのはそれほどたくさんあるわけではない。

この「意図」の分類を考えると、「行動展開表現」「理解要請表現」「自己表出表現」という表現の分類²⁾が役に立つものと思われる。「行動展開表現」とは、表現の結果、「表現主体」かその「相手」か、あるいはその双方が何らかの行動を起こすタイプの表現であり、その「表現意図」は「忠告・助言」「誘い」「依頼」「指示・命令」「許可求め」「申し出」「提供」「確認」「宣言」など³⁾である。一方、「理解要請表現」は、「表現主体」の発したメッセージが理解されれば十分目的を達するタイプの表現類型であり、「良好な人間関係を設定・維持・強化」するのが「表現意図」となる「あいさつ」や「ほめ」、「集まりにおける自分の立場の表明とその役割の遂行」を「表現意図」とする「ご挨拶」など⁴⁾が具体例となる。このような「表現意図」をかなえる表現群は、ある程度談話の構成や使用される語彙（狭義敬語を含む）の基本的なものが決まっており、それらをきちんと押さえておけば、それほど「微妙なニュアンス」で悩む必要はない。時間的な余裕があれば、また学生にニーズがあれば、これらの表現の「一般成人同士」のバージョンと「親しい友人同士」のバージョンの、二つの大きなカテゴリーの練習をすることができ、それで現代日本語で生活に必要な待遇表現の主要なものはカバーできる⁵⁾。

「社長はもう帰りました」から「社長はもう帰られました」に単純な変換ができて、勤務先の社長について外部の人に説明するときには尊敬語形でないほうを使うというような、場面を使う練習を初級の段階でどのように工夫してできるか（高・補）

この記述は、ウチ・ソトの使い分けに関する問題である。これも、ビジネス場面から始めようとせず、家族紹介の作文やショート・スピーチで自分の親兄弟・親戚を「お父さん」「お姉さん」「おじさん」と呼ばずに「父」「姉」「おじ」と呼称することから始めてウチ・ソトの感覚を養ってからビジネス場面に進むとよい。ビジネス場面においては、ウチの扱いについて「社長をへりくだらせる」と考えずに「外部に丁寧に対応する」と捉えさせることが大事である⁶⁾。

その際、まず「社長は、出ております」「課長は、ただいままいります」などのオル・マイルが入った表現を取り上げ、これらの敬語が、話題の人物間の上下関係を表す「謙譲語」ではなく、相手に対してかしこまった態度を表明する「丁寧語」だと捉えることを徹底させることが重要である⁷⁾。そうすれば、「社長は、出ております」は[社長八出テイル]という事実を外部の人に対してきちんと報告したものであるという説明ができ、ウチ・ソト関係の表現を「相対している相手には丁寧に」という普遍的な言語現象として捉えさせることができる。

次に、「相手に丁寧に」するためには、相手以外の人物を高く扱わないほうがよい。例えば、[コチラノ社ノ課長ガ説明シタ]については「当社の課長がご説明しましたように」と[説明スル]の概念に謙譲語を使って、相手のほうが高いことを積極的に示すことが行われるということを説明すると分かりやすい。この程度の説明なら、中国語で行えば簡単に済むし、日本語で行っても、初級後半の学生にであれば理解されるであろう。

なお、[コチラノ社ノ課長ガ説明シタ]についても、もっとも大事なのは「こちら側をへりくだらせる」ことではなくて「相手に丁寧に対応する」であるため、硬い・丁寧な語感を持つ「当社」や「～ましたように」を使っておけば、謙譲語の「ご説明する」は必ずしも必要ではなく、「当社の課長が説明しましたように」で十分であるということも、学生に知らせておく必要がある。

「ですます体」と「常体」はどちらを優先して教えるか(高・高) / 学生にグループ活動方式で発表する課題を出すと、場面設定を家庭内や友人間にしてくる場合がある。この場合、発表する会話などは普通体でないといふ不自然だが、この段階では普通体を勉強し

ていない。こういうことについてはいつも困難を感じる（中・高）

この二つは、デス・マス体と非デス・マス体（ダ体・deal体）に関する指導上の問題点の記述である。まず、非デス・マス体を「常体」「普通体」と捉える考え方を改める必要がある。日本語の待遇表現においては、もっとも基本となるスピーチ・スタイルはデス・マス体で、それが unmarked なのであり、非デス・マス体は、口頭表現では「親しさ＝なれなれしさ」という待遇特徴を鮮明に表す marked な表現スタイル⁸⁾なのである。したがって、第1の記述に見る疑問、「「ですます体」と「常体」はどちらを優先して教えるか」に対する答えは、指導対象者が高校の交換留学生などでもないかぎり、「デス・マス体を優先」と答えざるをえない。

そのうえで、第2の記述にある問題点であるが、まず非デス・マス体を学習していない段階で家庭内や友人間の会話を場面設定するような練習はさせるべきではない。課題を出す際に学生にそのことを徹底することで記述にあるような不都合は防げる。ただし、「友人同士」と言っても、日本では「それほど親しくない友人・同僚」と言う関係も考えられるため、台湾文化における「友人」の概念を学生にも反省させつつ、そのような関係を導入・設定してもよい。

3-1-2. 指導の時期と範囲

以下は、指導の時期をいつにするかについて決定する際の困難についての記述である。

三年生の「観光日語」のクラスから待遇表現を教え始めているが、それでいいかどうか（高・専）/ある程度日本の文化や社会への理解がないと、敬語を使いこなせないと思うので、中級段階以前に尊敬語や謙譲語を教えるべきかどうか（高・高）/初級レベルから敬語の機能や実用性を意識させたほうがいいのかどうか。敬語を強調しすぎると不安や混乱を引き起こす。「いつから、どの程度、どこまで」教えるのか（高・高）

確かにある程度「日本文化や社会への理解」がないと敬語は教えにくい面が

あるかもしれないが、「敬語 = 日本文化」のような短絡思考⁹⁾に陥らないように、教師はこころがけなければならない。「敬語」を尊敬語や謙譲語のような語彙の問題としてではなく、「相手に配慮を示す言語・非言語表現群」として表現の問題として意識させれば、「あいさつ」「依頼」「申し出」「誘い」など初級文型・文法の範囲で処理しうる、どの言語にも基本的に存在する日常表現がすべて「敬語」と関係しうる事が分かる。したがって、教師は、例えば、「あいさつ」を導入する際には「さようなら」のほかに「失礼します」があることも学習させ、「依頼表現」の練習のときには依頼内容の「当然性」の基準により表現が使い分けられる¹⁰⁾ことを説明して、それに沿った練習を考案すべきである。初級の始めから、このような表現の選択に慣れさせておき、場面に応じて狭義敬語も少しずつ導入していけば、中級で本格的な敬語教育に入る前に、敬語の抽象的な体系説明に必要な個別の具体的な表現が豊富に学習されていることになり、学習者の負担は大きく軽減されるのである。

『新日本語の基礎』と『みんなの日本語』を使っていると、20課で初めて常体が導入され、49課・50課でそれぞれ尊敬語と謙譲語にふれるだけである。すると、2年生の学期末のほうで敬語がちょっと出てくるということになって、定着を確認する前に休みに入ってしまい、新学期にはほとんどの学生が敬語を忘れてしまう(高・高)

伝統的な「文型積み上げ式」の教科書ではよく起こる問題である。前述のとおり、教科書の最後のほうで狭義の敬語の説明が出てくる前に、初級文型・文法で表しうるさまざまな表現(本稿注1)の「チャンピオンのスピーチ」なども含む)で敬語や敬語概念を導入しておくことが肝要である。敬語は「文型・文法」ではないので、「文型積み上げ式」教科書では、敬語の教育は語彙教育のレベルに矮小化されていること¹¹⁾を認識すべきである。

「食べる」に関して:「食べてください」より「召し上がってください」のほうが丁寧。「お食べになってください」「お食べになさってください(ママ)」は二重敬語。「あがる」は会話では使われないと思う。「食べられる」は受身と混同するかも。一応すべて紹介するが、できるだけ基本的な敬語を薦めている(北・高)

上の記述は、指導する敬語の範囲についてのものである。台湾ならではの指導の細かさだが、「基本的な敬語を薦めている」というところは共感を覚える。ただし、「基本的」なものだけが一つだけとは限らないので注意を要する。たとえば、[イル]についてはイラッシャルが尊敬語だが、イラッシャルは日常的な「柔らかい」敬語であり、それがカバーできない「硬い」語感の敬語が必要な場面では丁重語由来のオラレルのほうが基本的である。

3-1-3. 学習者の誤りや質問に対する対処

指導の方法に続いては、学習者の問題についての記述が見られた。まずは、学習者の誤りや質問に関する記述である。

「あなた」をみだりに使う（北・中／高）／中国語の影響か、「林先生、あなたの誕生日はいつですか」のように「先生」と「あなた」を併用する（中／高）／教師相手の会話で普通体を使用（北・中／高）／日本で暮らしたことのある学生が「敬語は使わなくても通じるし、かえってかわいい」と言って、常体で話しかけてくる（高・他）／授業終了後学生が「先生、お疲れ様でした」というのは正しいか（北・中／高）

日本語でアナタを使うことの危険性については、十分に説明しておく必要がある¹²⁾とともに、教科書や教材からアナタを取り除くことが求められる。教師への非デス・マス体の使用については、それが「なれなれしさ」を表し、無礼であることを言うよりも、目上にそのスタイルを使うことで当の学習者が小学生程度の未熟な人間に見られるということを了解させるほうが納得されやすいようである。日本帰りの学習者の上記のような反応に対しても、そのような話のできる相手がだれだったかをきちんと反省させる必要がある。

最後の問題に関しては、蒲谷・川口・坂本（1998）pp. 214-218に詳細な解説があるので、参照されたい。

自分を「～さん」づけする（北・中／高）／断りに使う「～はちょっと…」の「ちょっと」の発音がおかしい。学生がその複雑な意味を知らないためか（中・高）

自分へのサン付けは中国語でも正しい表現ではないので、そのことに気づかせれば自然に修正される。次の発音の問題は、単音レベルではなくプロソディレベルの問題だと思われる。普通のチョットと断りのチョットを聞かせて、音の特徴を区別させてみるとよい。

3-1-4. 学習者の心理に関する問題点

学習者の心理についての次のような記述は、世界各地の日本語教育現場で認められる。

学生は教師とずっとデスマス体だけの待遇表現でスムーズに話をしてきたので、敬語を使用する段階になってもすぐには慣れない(北・高) / 敬語を教える段階になると、いつも学生が混乱し、学習をいやがる(中・高) / 学生が誤って使うと誤解を生むと、恐がって敬語を使おうとしない。それで、そのまま忘れてしまう(高・補) / 恥ずかしがる学生にどのように口を開かせるか(高・専)

初級の初期から敬語概念と敬語を段階的に導入していくことの大切さが、このような記述からも理解されると思う。受身・使役・自他動詞の別などむずかしいもの並ぶ教科書の学習項目の最後が敬語で、そこで初めて敬語の複雑な社会的規則と膨大な語彙群を与えられれば、学習をいやがらないほうがおかしいとさえ言える。誤りを恐れるのも恥ずかしがるのも、「手におえない」ものから逃げようとする心理の表れである。「チャンピオンのあいさつ」のように日常化し、繰り返して提示すること、インタビュー練習などで他の学習者の性格や生活を言葉を通じて知ることの楽しさに気づかせることが必要である。

専門学校なので、直接将来の仕事と関係しない日本語に学習者の学習意欲が湧かない。(北・専) / 接客業につく可能性のある学習者なので、接客用語を丸暗記させているが、あまり問題がない(北・専) / 学生は、日本の流行文化には興味を持っているが、真剣に日本語を勉強したがるものは少ない(北・専)(中・中)

始めの二つの記述は、台湾で「五専」と呼ばれる5年制高等職業訓練校の教

師のものである。学習の促進にとって動機づけがいかに重要な好例である。前者の講師には気の毒だが、「成績のため」に受けている語学で学習意欲を期待するほうが間違っている。せめて教室に来るのが楽しいという雰囲気作りを教師がこころがけるしかない。最後の記述も動機づけ関連だが、流行文化への関心を安易に学習動機と結びつけるのは慎んだほうがよい。好きな日本語の歌なら、歌詞の意味さえ知らずに丸暗記できるものである。

3-2. 学習・教育環境に関する問題

台湾の日本語教師による「事前課題」の最後の記述は、教育制度・時間や施設の制約・日本語使用環境の欠如・マスコミからの影響など学習と教育の環境に関するものである。

選択科目の日本語は週に2時間なので、教科書の後半に出てくる敬語はいつも教えきれない。どれくらい教えておけばいいのか悩む(北・高)(高・専)(高・補) / 文法と会話とをどのように合流させるか(高・専) / 時間的な制限のため、待遇表現の背景にある日本の文化の説明ができない(中 / 専: 日本で丁寧な表現を友人に指摘されたので、外国語の使用は文化理解だと思っている)

時間の制限を克服して敬語を教えようと思ったら、文法と敬語とを組み合わせで教えていくのが最善である。その方法は3-1-1節で述べたようなものになる。とにかく、敬語を教科書の最後のほうまで取っておくのは、いかなる意味でも得策ではない。時間の制約は、文化の説明を考えるとあっさり厳しく感じられるが、これも3-1-2節で述べたように、あまり「日本独自の文化」の理解を意識させず、むしろ「相手に配慮した」表現の普遍性に気づかせ、「こういう考え方は台湾も同じ」という方向に意識を向けるほうがよい。

敬語は、使う機会がすくないので、どう教えればよいか(高・初中) 日常生活でどう使わせればよいか(高・高) / 敬語を自然に習得させることはできないから、自然に身につけることができない(高・高) / 学生が多すぎて、お互いに練習する機会は少ない(高・専) / 学習者のレベル差が激しい(初心者・既習者・日本滞在経験者が混在)の

で、教材選びに苦労する(中・中)

日常での敬語使用を求めるのは、学習者が日本企業に就職しているのでもなければ、期待が大きすぎる。それでも、日常生活で使える機会を増やし、「自然に習得」させなければ、また学習者に練習の機会を与え、レベル差の問題を解決したいのであれば、教室内の活動を考えるだけでなく、教室の内と外をつなぐことを真剣に考えなければならない。これは、つまり日本人を教室へ連れて来るか学習者を外に出すかして、日本人とインターアクションさせるということである¹³⁾。学習者が多すぎたり、学習者間にレベル差があるようなときは、彼らを同じ程度にできる者の小さなグループに分け、グループごとに日本人を配置し、タスクを与えて日本人にインタビューさせる。レベル差のある場合は、同じタスクを全グループに与えて成果の評価にハンディをつけても、はじめから難易度の異なるタスクを与えてもよい。「自然な習得」は、やはり自然に近い談話状況を必要とするのである。

教室で教える日本語は、日本のドラマの日本語と異なる。ドラマではデスマス体で話さない(北・中/高)(北・専)

日本の大衆文化が手近にある台湾らしい問題点である。自然な日本語に接する可能性のある環境がかえって敬語習得の障害になるという皮肉が見える。これについては、上記の記述をした教師のうち、台北の五専教師がその記述の後にかっこに入れて付け加えた一文に本論の筆者も賛同する。いわく、「日本の若者同士は常体で話せるが、あなたがたは外国人として初対面の日本人にはデスマス体で」

4. まとめと今後の課題

以上で、3回に分けた連載論文「海外における待遇表現教育の問題点 台湾での研修会における「事前課題」の分析」を終了する。それぞれの回のまとめを行うと次のようになる。

(1)「狭義敬語」がいまだに「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」の3分類でし

が説明されていないことから来る敬語の用法把握の混乱が見られた。

「丁寧語」を「謙譲語」から、「美化語」を「丁寧語」から、それぞれ分離して説明する必要がある。また、イカガのような「狭義敬語」に入らない「丁寧語彙」の存在に注目すべきである。

(2)「敬語表現」の問題を、「狭義敬語」の有無や「上下関係」の把握という点でしか捉えていないことに由来する「日本人とのコミュニケーション障害」の問題点が指摘できた。また、中国語と日本語の待遇意識の相違から日本語の待遇表現に対する誤解や無理解が生じうることも判明した。日中両言語における待遇表現の普遍的側面と個別的側面の対照研究がこのような問題の解決に寄与するであろう。

(3)敬語の教育を「狭義敬語」の語彙教育や「上下関係」を意識した会話教育に矮小化することに起因する学習の困難点が明らかになった。その解消のためには、敬語を、文法項目の導入・練習にからめて、初級前半から段階的に教えていくというような、指導法の変革が必要である。また、「自然な学習」を志向するのであれば、教室の内と外をつないでいく方策を見出すべきであることも議論した。

以上のまとめから、台湾における敬語教育は、待遇表現の普遍性と個別性を、日中両語の対照研究によって見据えつつ、「狭義敬語」の学習から脱して、「いかにして相手への配慮を表すか」という表現の教育へと向かっていく必要があることが指摘できる。待遇表現の言語間の対照研究は、日中両語間でのみならず未発達の部分で、今後取り組んでいくべき課題の最大のものであろう。一方、「配慮の表現」としての待遇表現、およびそのうちの「丁寧さ」に強く配慮した「敬語(敬意)表現」については、ある程度の研究の蓄積があり、その教育への応用も示唆され始めている¹⁴⁾。今後は、さらに具体的な敬語表現教育の指導法やカリキュラム開発について提案していくことが要請される。敬語表現の対照研究と教育方法の開発の双方を今後の課題として、連載を終了する。

[参考文献]

蒲谷 宏・坂本 恵(1991)「待遇表現教育の構想」『紀要』3 pp. 23-44 早稲田大

学日本語研究教育センター

- 蒲谷 宏・川口義一・坂本 恵 (1998)『敬語表現』大修館書店
- 川口義一 (1993)「海外キャンパスにおけるプロジェクトワーク その可能性と問題点」『講座日本語教育』28分冊 pp. 1-19 早稲田大学日本語研究教育センター
- 川口義一・蒲谷 宏・坂本 恵 (1996)「待遇表現としてのほめ」『日本語学』第15巻5号 pp. 13-21 明治書院
- 川口義一・蒲谷 宏・坂本 恵 (1998)「待遇表現としての「ご挨拶」について」『早稲田日本語研究』6 pp. 26-40 早稲田大学国語学会
- 川口義一 (2002a)「海外における待遇表現教育の問題点 台湾での研修会における「事前課題」分析(1)」『紀要』15 pp. 15-28 早稲田大学日本語研究教育センター
- 川口義一 (2002b)「海外における待遇表現教育の問題点 台湾での研修会における「事前課題」分析(2)」『講座日本語教育』38分冊 pp. 1-15 早稲田大学日本語研究教育センター
- 杉戸清樹 (1997)「敬語教育の課題 敬語行動の中の敬語を」『日本語学』第16巻13号 pp. 4-13 明治書院
- 萩野貞樹 (2001)『みなさんこれが敬語ですよ』リヨン社
- バルバラ・ピッツィコーニ (1997)『待遇表現から見た日本語教科書 初級教科書五冊の分析と批判』くろしお出版

注

- 1) 筆者の担当する集中講座初級後半クラス(1.5時間×11回×15週)では、第2週目あたりから、この「チャンピオンのスピーチ」を開始し、短い挨拶だけの形から始めて徐々に複雑にしていき、第7週目あたりで、「みなさん、おはようございます。...からまいりました...でございます。おかげさまで、今週の文法のチャンピオンになりました。これからもいっしょけんめい勉強いたしますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました」というスピーチが言えるようにしている。第4週目からはインタビューアールが登場し、チャンピオンに勉強の秘訣から恋人の有無まで聞きただしたり、他の学生に質問させたりする。
- 2) この三つの表現類型についての説明は、蒲谷・川口・坂本 (1998) pp. 26-29 参照。
- 3) 「行動展開表現」の詳細については、蒲谷・川口・坂本 (1998) pp. 117-124参照。
- 4) 「あいさつ」については坂本・蒲谷・川口 (1996)、「ほめ」については川口・蒲谷・坂本 (1996)、「ご挨拶」については川口・蒲谷・坂本 (1998) を、それぞれ参照されたい。なお、「自己表出表現」は、その性格上待遇性を持たないが、「依頼表現」などに転用される可能性がある。「暑いなあ、この部屋」と独り言のように言いながら、実は「窓を開けてくれないか」と「依頼」するような場合がこれに当たる。
- 5) 筆者は、1999年・2001年度・2002年に、早稲田大学国際教育センターの「国際部」

(海外の提携校などから junior year abroad や term-long の学生を受け入れ、日本語と英語による科目講義を提供する学内組織)で「待遇表現ワークショップ」を行っているが、全15回の講義で、「あいさつ」「自己紹介」「誘い」「依頼」「許可求め」「電話」「手紙」「申し出」「意見を述べる」「陳謝する」などの個別表現と「発表」「司会進行」「質疑応答」の討論型コミュニケーションの練習を十分行うことができている。

- 6) ウチ・ソトの把握のしかたについては、川口(2002b) pp. 3-4 および注5)参照。
- 7) 海外での待遇表現指導における「丁寧語」概念の重要性については、川口(2002a) p. 19、および p. 27の注5)参照。
- 8) より詳しく言えば、動詞に尊敬語・謙譲語が現われず、文末がデス・マス終止のスピーチ・スタイルが「基本的」と言える。この点については、川口(2002b) p. 2の注1)参照。なお、論文などの文章表現におけるデアル体のような非デス・マス体は、marked ではない。と言うより、論文のような表現形態は、その性格上、はじめから「脱待遇」あるいは「超待遇」なのであり、丁寧さを云々する必要がない。待遇表現指導の議論については、口頭表現のスタイルと文章表現のスタイルとは、別個に論じられるべきであろう。
- 9) 萩野(2001) pp. 67-68には、敬語を文化として捉えることへの厳しい批判が展開されている。
- 10) 「依頼表現」における「当然性」については、蒲谷・川口・坂本(1998) pp. 136-44参照。
- 11) 各種の教科書における敬語や待遇表現の扱いについては、ピッツィコーニ(1997)に詳細な分析がある。同書には本論3章で述べたような教授法や学習環境の問題に対して、本論の筆者と近い考えが随所にうかがえる。待遇表現教育に関する基本文献として一読を薦めたい。
- 12) アナタの卑称性については、川口(2002a) p. 26および注15)参照。
- 13) 海外におけるこのようなインターアクション教育の実例としては、川口(1993)参照。
- 14) 配慮の表現としての敬語教育を志向した論文として、蒲谷・坂本(1991)、杉戸(1997)などがある。